

## 第5回FD研修報告書

生命先端工学専攻 岡澤 敦司

California State University Fullerton

2011.3.7-19

この度、国際連携大学院FDプログラムの第5回海外FD研修に参加する機会を頂いた。今回の研修前にもこれまでに既に参加された先生方の報告会などで話しを聞く機会があったものの、まさに百聞は一見にしかずで、非常に貴重な体験をさせて頂いたというのが、まずもっての感想である。

今回は参加した先生がすべて助教ということもあり、先方で若いチームともてはやされることもしばしばであった。全員が普段は講義を持っていないということで、先方の先生にすれば同程度のレベルの生徒を相手に講義をしたことになり、多少やりやすかったのではないだろうか。私が年長ということで一



応リーダーということになったが、レセプションでのスピーチが回ってきたぐらいで、さしたる自覚もないまま、いかにも西海岸らしい雰囲気の中、参加者全員で研修を楽しむことが出来た。この研修の中で異分野の同年代の先生方と交流が出来たことも一つの収穫であった。

前回までに参加された先生方も感じられていることだと思うが、プログラムは非常によく計画されていると感じた。また、それを支えるスタッフの献身的なサポートや責任感には敬服した。講師やメンターの先生方も含め、極めて高いプロ意識を持ってプログラムを運営しているように感じた。

プログラムは基本的に3つのパートからなっている。まず、FDワークショップでは教育についての講義を受けた。教育者とはどうあるべきか、学生の興味を引き出すための技術、評価方法などについて体系だった講義がなされた。普段、研究室や学生実験などで何気なく行っていることについても深く考える機会となり、教育に対する意識が変化するの

を感じた。これらの講義で学んだことはメンターの授業を見学することで実感することが出来た。とにかく、学生に頻繁に問いかけることが印象的であった。また、個人だけで考えさせるだけではなく、時には2,3名のグループで話し合いをさせてから答えさせることも多いということも学んだ。現在のアメリカの教育では共同作業やディスカッションを重視しているという印象を受けた。その分、授業の内容は豊富ではなかった。しかし、ポータルサイトに補足資料を提示したり、クイズを出すことによって自習を促すように工夫されていた。実際、学生は授業中わからないときには活発に質問をし、先生からの問いかけにもよく答えていた。3つめのパートは英語のクラスで、いかにネイティブに近くしゃべるか、また、プレゼンの際に気を付けることなどを学んだ。2週間の滞在中に自分の英語力がずいぶん増したように感じたが、帰国後日本語べったりの生活でまたもとに戻ったかもしれない。



これらのすべての講義の集大成としてゲストレクチャーが準備されていた。参加者のほぼ全員が日曜丸一日を講義の準備に費やした。私の場合、メンターのシラバスの中の一コマを実際に担当させて頂いた。メンターが用意してくれたパワーポイントを使っての講義となった。幸い原核生物の転写という基本的な内容だったので、英語に注意すれば説明することは問題がなさそうであったが、いかに学生に興味を持ってもらうかについては気がつかなかった。一応、授業を通してなるべく多くの質問をするように、また、回答までに十分間をとるように心がけた。ただ、学生の回答が聞きとりにくかった等、予想外に苦労する場面もあった。授業後、学生からのフィードバックやメンタープロフェッサーとの面談での質問の時はグループワークにした方がよかった等、具体的かつ非常に有益なアドバイスを頂き非常によい体験が出来た。

今回のFD研修で教育、授業に対し、より明確な目的を設定することが重要であることを実感した。学生のプレゼンテーションの相互評価のシステムなどは研究室でも実践してみようと考えている。関係各位に心より感謝申し上げる次第である。